

# 公益を背負った山伏

― 一般に膾炙された山伏の公益性 ―

水戸部浩子

平成五年（一九九三）に出羽三山は開山、一四〇〇年

を迎えた。いくつかの行事の中に、羽黒町でおこなわれた「全国修験道サミット」があり、修験にかかわる学者や民間人が修業とは何か、山伏の実態にふれた。ふつうは秘して語らぬ修験がおおびらに公開され、研究され、発表されたのである。いきさつが一般化したことだった。

誰でもが参加でき、体験を共有できる、いわば体験学習となってきた。そのなかでも羽黒修業は形をくずさず、原形のままにのこされている、珍しい例であるらしい。私の友人にも山伏が何人かいる。普段は普通の生活をしており、しばらく顔をみないでいると、

「秋の峰入してきた」

と、海外旅行にでも行ってきたようなさばさばした気軽

さで話をする。

「二週間の休暇をとってね」

と、彼はほとんど変わらぬ声音で言った。いささか頬の肉が落ちたように見えたので、ついこちらも

「ダイエット道場ですか」

と、聞き返す。

「まあ、そんなところだが心身のダイエットかな」

分かりやすい言いかたである。身体ばかりでなく、心についたアカとか余分な肉を削げおとし、新しく生まれかわる、人生の再生を果たしてきたのだ、という。今流にいえばリフレッシュ休暇に匹敵する。

「でもね、このごろは老人とか、女性が多くなってね」

修業の高齢化と大衆化が進んでいるようだった。

会社のリストラにあつた人、自ら会社をやめた男性や転職を考えている人、恋愛や結婚で迷っている女性、連れあいを亡くした人、ここで何かふんぎりをつけたい意図をもち、入峰をする。一週間の予定コースで人生の転機を図る、いかにも現世風な現代人むきの考えかただが、修業のプログラムは「死」と「再生」にあつた。擬死体験をし、ふたたび里へもどつてくる。まことに素朴な理に適つた心のリサイクルなのである。しかもそのコースは心身ともに鍛練を要する組みあわせがなされており、十界の行ともいわれる。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六界を六道とし、声聞、縁覚、菩薩、仏の四聖を四界とかぞえ、十界修業と呼ぶ。これを手ぬきなくやつているのは、現代では羽黒山伏だけであるらしい。地獄、餓鬼、畜生と上記の三つはとりわけ三悪道とされるきびしさで、ここに「南蛮いぶし」が入るのだった。

生きながらに地獄のくるしみを味わい、一度地獄へ墮とし、六道をさまよわせ、そのあいだに生前に犯した罪のけがれを消去する。

飯は盛りきり一杯、お汁が一杯、漬物が二切れで餓鬼の空腹に耐え、顔を洗わず、ヒゲをそらず、風呂に入らないで畜生の境地になる。すべての人間の奢りや欲望やわがままや怠けごころをつぶして、現在ある自分を立て直す。験を修める業である。そして終了すれば補任状がもらえるのが、多くのひとびとに圧倒的な人気のもとになった。

羽黒山の開祖は崇峻天皇の第三皇子、おみなは峰子皇子。口つねに能除一切苦の文を誦さみたまふる故に能除仙といひ、または能除大師といわれた。法名は弘海と号し、修験道一派をひらき、舒明天皇十三年（六四一）十月に「石山に結跏趺座せるまま奄然として、薨じたまふ」と、三山開基の由来略説にある。

おそらくこの地での修験道のはしりではあつたろうが、確立されたものではなく、この描写によれば仏教の匂いが濃い。日本に仏教が渡来したのは五五二年なので、まして聖徳太子のいとこにあたる峰子皇子がその威力を知らなかったはずはない。都ではきらびやかな釈迦像が話題になり、舒明天皇が

「瑞厳し」

と、驚いたことが記されている。それまでの日本になかった蕃神ばんじんが入り、日本の五世紀といえ、山から魂が生まれ、死んで山へ帰る古代の山岳信仰が主流で、偶像を拝する習慣がなかった。せいぜい埴輪はにわをつくり、供養していた。自然を神々としていたからである。

だが開祖の死にいたるお姿は「結跏趺座」とあり、このスタイルはもはや仏教の影響をうけたしるしがある。足の甲で左右それぞれ反対側のもをおさえる形の座りかたは阿弥陀如来にみられる姿勢であり、仏語である。神仏混合が羽黒山でおこなわれていた、とみたほうが正しいだろう。

つけ加えていえば、六〇七年、大和の斑鳩いかにがに聖徳太子が法隆寺を建立しているので、仏教はおどろく速さで国中を席卷していった。戸川安章著『出羽三山―歴史と文化』によれば、室町時代の末ごろまでは羽黒山、月山、葉山の三山をそれぞれ観世音菩薩、阿弥陀如来、薬師如来と仏のおわします霊峰と仰ぎ、修験者の道場としていた。三つの山をまたに駆け、巡礼の足を運ばせたようである。

これを称して峰修業、入峰修業、峰中修業と、いつていた。

ここで注目したいのは、一山にマトをしぼらず、三点セットにくくったことである。

各山におわす仏もちがい、それぞれ主宰する内容もちがっていたらうに、組織を統一し、修験道としていった。なかなか相対的なやりかたである。

また阿弥陀経についてきたのが浄土であり、ほかにも弥勒菩薩が主張する浄土もあるし、薬師如来が唱える浄瑠璃浄土もある。ひろくいわれている極楽浄土が阿弥陀如来の主宰するところなのであった。

#### 「南無阿弥陀仏」

と、唱名するだけで極楽浄土にいけるといふ約束手形のようなものである。数多くの日本人がこのほうを信じきったとき、それぞれ個性のちがう三つの浄土をこの地においたのは、絶対への否定、ともうけとれる。

ここにおもしろい伝説がのこっていた。日本修験道の開祖とあがめられている葛城山出身の役小角（役行者）は、すぐれたシューマンであるのはよく世に知られてい

る。靈界と自由自在に交信ができ、行者は月山にやってきて、山頂に登ろうとした。ところが能除仙についている除魔童子と金剛童子があらわれ、

「汝は修業未熟ゆえに荒沢に引きかえして、能除仙の残しておいた不滅の清浄常火をもち、湯殿山の法流を修業してからでなければ山上にのぼらせるわけにはゆかない」

と、さえぎった。仏水池で押しもどされ、そのあとはいうとおりに修業をする。今でいえば、そのころの役小角はスーパースターである。それが約一世紀前の能除仙に追い返され、出羽三山のやりかたに順じた。知名度の高いスーパースターの来山にも平然と

「やりなおし」

を、命じた誇りの高さは内容重視にあつたのかもしれない。そのため彼が押しもどされた地点には行者戻しの場所があり、位置は仏水池のやや上方にある。日本全土に修験道を広めた役小角より百年先に、それらしき法流ができていたことをほめかす説話である。

だが本文は山伏の解説をするものではない。

庄内地方の社会を形成したバックグラウンド、精神風土を培ってきたものは何なのかを探るために山伏をもちだしたのだ。

出羽三山をかこむこの地では一四〇〇年にわたり、ごくあたりまえにお山とつきあい、山伏といつしよに地域社会をつくり、ともに価値観を共有してきた。入峰を終えた彼等に

「本當にごくろうさまでした」

と労をねぎらい、天下の人民に幸福を下し、世の蒼生を摂取して守護する、開祖いらいの感謝をのべた。人民に代わり、身をいたぶってきた山伏に、みんなは身内のよくな親しみを感じていた。年齢や身分や男女のへだたりなくいたわり、言葉をかけた。凡夫がやれない辛さを味わい、修業してきた行いへの敬意である。

「ごくろうさまです」

と、頭をさげて手を合わせるひとびとは擬似体験をしたような気になるのかもしれない。

誰とも知らない修験者に共感の声をあげ、平安を祈る共通のおもいをもった。社会思想と定義づけるには教義

がなく、ましてや語られぬ体験だけに村びとたちは正確には理解していないまでも、新しく「善」に生まれかわった人格を歓迎した。

罪ある者、けがれある者もこうして新しい命を得て、べつの人格になれることを衆目が認め、いわずと公認されたイデアになった。

山伏の存在がもつ公益性を里びとたちは一四〇〇年のあいだによくよく認知してきたのである。

### — 公益にある責任 —

公益のもつ表は誰もが良しとするが、公益の名を借りた悪も同時に発生する。補任状をもらった山伏には生きながらに即身成仏した信頼がよせられ、仏のころをもった人、という見方になったあと、だから裏切りの行為にはことのほかきびしかった。

山伏から罪人がでて死刑が決定されると、刑罪には石子づみがおこなわれた。罪人にケサと衣をきせ、補任状を首からつるし、刑場へ引っぱりだす。手はうしろに縛

られており、刑の執行場には一人分が入れる穴が掘られてあつた。穴底にはタラの木を敷きならべ、トゲのむしろが張りめぐらされてあつた。罪人はそこへ座らされ、いつせいに石を投げつけられ、身動きならず、のがれることもできない状態で石つぶてが飛んできた。

石の投げ手はおなじ修験仲間の山伏であり、彼等は口ぐちに唸仏をとなえつつ、石投げをやめない。こうすることが仏の供養、罪に対するむくいであるとされた。羽黒町手向の入口、松原がしかも処刑場であつた。

宿坊があつて里びとが住むところであり、妻子をもっている山伏もおり、生活の場になつている場所でわざわざやつた。これは村人への見せしめで、山伏は無論、里びとをふるえあがらせた。有髪で俗間でくらす山伏が多かつたせいで、情景をことごとく人目にさらさせ、公益を背負つてあるく者の違反行為、責任のとりかたに、地獄をみせたのである。

これは村中を戦慄させた。

なかば死にかけても死なない罪人はそのまま放つておかれ、誰も助けてはならないのである。浄土が極楽であ

れば、対極をじつさいにみせ、すべての人々に行いの自覚をうながした。

### — 教義のない公益のころ —

羽黒山伏が盛んなころは山麓山伏といわれる妻帯し、たのまれれば加持祈祷かじきとくをやる者が二六〇坊、安政五年（一八五八）の記録では、三、八七二人。その上に、位置する妻帯しない山内修験者が五、六百人、未派修験者まっぱといわれる一定の期間のみ修業をおこなう期間限定者が各在所にあつて、もとめに応じておなじようなことをやっていた。

山伏は山と里におり、羽黒在住者は四、五百人前後が山伏名を名のつていた。能除仙のころから仏教的な色彩はあるものの限りなく神道に近く、隨身門から入ると祓川はらいがわで身を清め、参籠をする。いわゆる仏教にはないしきたりをやつて、山岳信仰の原形をのこしつつ、現世と来世を行き来するストーリーをつくりあげた。生きかたの行動哲学をカリキュラム化した、といえる。また装束も独

特である。

摺衣すりえ、白の袴はかま、頭襟すてん、剣先脚絆、結袈裟むすけさ、貝の緒を身につける。うわ着にあたる摺衣の模様も羽黒ファッションで紺の市松が染めぬかれ、背中と両袖には獅子紋がついている。

背中に負う笈げきは魂をいれる棺桶にもなるし、新しい生命を宿す胎盤の役目もする。創造の産物である。

ひとの一生におこるさまざまな苦難やできごとをかいつまんでフィルムフィルムの早送りのように短縮して体験をし、そこから人生を見直す。

するともつとおおらかになり、ささいな日常を克服できてくるらしい。体験者によれば

「有難い」

と、いう思いがこみあげて人、物、みなを等しくいつくしむ気持になるらしく、密室で唐ガラシと糠の煙でいぶされ、息も絶え絶えに外へでた時の空気の有難さは肺の奥深くに記憶されてしまうようだった。

「呼吸するときに空気を意識しますね」

目に見えないものに敏感になる。そして空気のおいし

さ、水の味などがわかり、自分を生かしてくれる存在に気がつく。

「それよりも何事につけ、物事を相対的にみるようになりましたね」

この項を書きつつ、さて宗教と非宗教の定義はどこにあるのか気になりだした。ある学説の分析によれば、宗教とは、

「教祖がいること、教義や儀礼があること、布教活動があること」

などが、あげられるそうだが、必ずしもこの三つがそろっていないことも、

二つぐらいが顕著にみられれば宗教の範疇に入れませんが、学会ではいつも議論になり、宗教学者たちも割り切れない面があります」

羽黒山伏をみるかぎり、他宗教の良いとこどりをしたふしがあり、もともとあつた土地の神にたし算をしてきたような、考えかたとしては相対的な流れになった。いみじくも体験者が表現した相対化こそが、この地に散布されてきたものなのではなからうか。イスラム教、キリ

スト教、ユダヤ教に説かれる一神教の絶対さがないゆえに、それが特色なのである。

そこで非俗である山伏は俗界に住み、困りごとを肩代わりするような社会の特異な存在になった。

里山伏たちのおおまかな仕事は加持祈祷のほかにはケンカ、もめごと、嫁入りなどのよろずの相談ごとが多く、民生委員のような仕事をひきうけていた。ふるい文献によれば村内の治安維持係といった内容が読みとれる。

地域社会の中にこまごまと入りこみ、寺をもつ僧ではなく、宿坊を営んで信者を泊め、悩み相談ごとにあたり、江戸期に隆起をきわめた。摺衣すりえの着物もこのころ完成されたのかもしれない。染めるのではなく、版木で模様を押し刷った衣類で多量生産ができる、羽黒ブランドの装束は全国へ売られだされ、当時の六十六カ国のうち羽黒山は東国三十三カ国を縄張りなすはな（霞場）におさめた。

西国二十四カ国が熊野派修験、九州九カ国は彦山派修験のカスミ場となった。現代につづいているこの法燈は身をもって修験道に入ることがない人々でも、その行動や考えかたを支持することによって、公益こういどころを会得

した。羽黒山のカスミ場は青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島の東北六県を中心に、千葉、新潟あたりにおよんでいる。

— 社会思想としての公益性 —

これまでのべてきた羽黒山伏の誕生は山岳信仰に仏教がプラスされ、さらに明治維新が神仏分離になり、出羽三山神社に司えるひとびとは神職になった。改変はいくつかあった。

しかし修験道はえんえんと続いており、思想としての道教がくわえられたり、現在のカタチになったのは鎌倉時代かとおもわれる。

建久四年（一一九二）、源頼朝が羽黒山上の本社を修造した。名目は

「奥羽平定報賽」

と、ある。ついでにふもとに黄金堂も建立した。山伏の勢力は無視できないものになっており、関連づけていえばよく芝居や歌舞伎にでてくる勧進帳の弁慶となりが、

羽黒山伏に似ている。とりわけ東国は源氏びいきで義経を討ったあとでも、彼のうわさが語りつがれ、ファンが多い出羽国に統治者の兄は三十三体の仏像を安置した。金色にかがやいていたので黄金堂の名がついた、といわれている。

たしかに羽黒山伏は人数も多く、勢力といわれるほどの力になっていたのでろうが、おもての歴史にはほとんど個人名が表記されてこない。役小角がやってきた説話をとると、七世紀には西とは違うカタチがすでに定着していたとみるべきであり、多分に密教がミックスされていた。

山伏の祖といわれる役小角は仏教と道教をつたえた、ともいわれる。道教は中国に発し、

「和光同塵、無、円、空」

右のことばで代表された。没我をもつて世のため救世のため生きることを語る教えであり、多神教の見本のとき面があった。

自然の中に神も宿り、仏も宿っているのを容認してきた地では物事を相対として、いつでもとらえており、山



には山の神。川には川の神。しかし神はお説教をしたりはせず、山は山に、川には川神の本性があつて、それを村人は受け入れるだけであつた。山伏ことばに訳せば「うけたもう」で、ある。

話は一変する。

平成十二年（二〇〇二）、酒田市に東北公益文科大学が創立してからことあるごとに、

「何を勉強する学校ですか」

と、訊かれる。

「読んで字のとおり公益とは何かを考え、学んでいく学校です」

と、答えたのに相手は不可解そうに

「公務員でも養成するところですか」

こう返答してくる。そうであれば分かりやすい、といわんばかりのやりとりになつてしまふ。結果的に公務員になる人もあるだろうが、もつと広範な学問としての体系づけを解説してあげたいのに、私の浅学菲才ではうまく説明ができない。うろたえているうちに敬愛する国際学者に、こう反撃された。

「君、公益学なんておつしやるけど、すべての学問が公益でなくって何なの」

あらゆる学問の源は公益であるべきで、もし私益であるとすればそれは学問ではない。

彼は自他ともにきびしいひとなので、

「公益学なんてぼくにはわからんし、理解できない」

と、肩をすくめた。だが学問とはある原理に従つて組織された知識の体系だとすれば、公益学にはさらにもう一つ熟語が入り、「知識と行動の体系」に、なるのではなからうか。

このとき例題として、山伏が浮かんだ。

医学、農学、工学、社会学、経済学、すべての学問を実践、行動に移すときの公益性を社会思想として考えてゆく。山伏たちが一四〇〇年にわたりやってきたことを学問として、体系づけていく。これは山伏の研究という意味ではない。

加持祈祷するときの総合学科のような交通整理をやりつつ、彼等なりに公益性を考え、やってきた。その場合の道しるべになつたのが、相対的にものごとを考えてゆ

く思考法である。二十一世紀は誰もが認めるグローバルな時代である。

その中で教え、つたえられてきた相対的な解決法はきつと、これからの国際社会で不可欠な課題になつてくるはずである。ぜひ公益学の対象にしてゆきたいものだ。それゆえ庄内地方を深く知るためにも、山伏にみるような社会思想としての公益性を探求してみたい、と思つて  
いる。